View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

女子大学生のキャリア意識と幸福感
―学部間の比較―

吉　村　　英
（本学教授）

本研究の目的は，女子大学生のキャリア意識や幸福感を学部ごとに比較検討することによって，それぞれの学部特性に応じた効果的なキャリア教育を行うための基礎資料を得ることにある。

わが国においては近年，フリーター志向の広がりやNEET（Not in Employment，Education or Training：働かず，学校教育を受けず，職業訓練に参加しない者）の増加，新規就業者における早期離職者の増加などの問題から，学校教育と職業生活との接続に課題があることが指摘され，青年期におけるキャリア発達の問題が注目されるようになってきた。また大学卒業生の就職状況も，就職氷河期と評された時期と比べるとやや好転はしているものの，依然として厳しい状況にある。就職率は大学評価における重要な項目であり，各大学においても「勤労観や職業観」を育てるための教育が求められるようになってきた。つまり大学が育成すべき資質・能力を問い直すとともに，新たな教育機能を整備することが重要となってきたのである（國眼・松下・苗田，2005）。このような時代背景のもと，各大学では効果的なキャリア教育の在り方を探る試みがさまざまに行われている。

ところで効果的なキャリア教育を考えるためには，まずキャリアとは何か，キャリア教育の目指すものは何か，といった問題について検討しておく必要があると思われる。というのも，キャリアという言葉は非常に身近であるとともに多義的な言葉でもある。したがってキャリアという言葉やキャリア教育という概念を明確にすることなく用いれば，それぞれが自己流に解釈し，議論が混乱する恐れがあるからである。

キャリアという言葉は，現在非常に日常的な言葉として使われているだけでなく，人によってさまざまな意味に使われている。日本においては一般的に，職業や職種という意味で使われていることが多く，昇進や昇格といった意味を含んでいる場合もある。Hall（2002）はキャリアという言葉の持つ意味を，昇進，専門職，生涯を通じた職務の連続，生涯を通じた役割に関する経験の連続，の４つに分類している。Hallはさらに，キャリアはプロセスであり，仕事に関する経験の連続であると述べている。Schein（1990）はキャリアを「外見上のキャリア」と「内面的なキャリア」に分けて考えている。「外見上のキャリア」とは，ある人が，ある職種に就き，昇進していく過程で，その職種または組織から要請される具体的な段階を指している。「内面的なキャリア」とは，仕事生活が時とともにどのように発達してきたのかについて，本人がどのように自覚しているかということであり，心の中にある主観的なイメージであるといえよう（Schein，1990　金井訳 2003）。Super（1980）はキャリアを，役割と時間という２つの次元からなるライフ・キャリア・レインボーという概念で捉えようとした。キャリアとは人生の各時期（ライフ・スパン）に果たす役割（ライフ・スペース）の組み合わせであり，一生を通じて行う選択と意思決定のプロセスであると

注　本研究は文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム「女子学生のキャリア教育の体系化と普及」の調査研究のデータを再分析したものである。

述べている。このようにキャリアという言葉の定義は研究者によってさまざまであるが，心理学の理論的，実証的な研究でキャリアという言葉が用いられるときには，仕事そのものではなく，仕事と関わる個人の認知や行動という主観的で内的な側面に焦点があてられているという点では共通している。そこで本研究においても，キャリアを単に職業や職歴とは考えず，「自分の生き方，人生を考えていく上で，働くことをどのように捉え，どのように関わっていくかという，選択と行動のプロセス」であると考える。

つぎにキャリア教育については，1999年の中央教育審議会答申で「望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに，自己の個性を理解し，主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」と定義されている。さらに2005年の社団法人国立大学協会「教育・学生委員会」の報告書では，キャリア教育を「学生のキャリア発達を促進する立場から，それに必要な独自の講義的科目やインターンシップなどを中核として，大学の全教育活動の中に位置づけられる取組である」としている。またキャリア教育の具体的な目標として，国立大学協会「教育・学生委員会」は「①社会や職業社会への「移行期」にあたり，自らの将来・人生を大まかにでもしっかりと設計できること（キャリア設計能力） ②職業生活の中で自分が何を実現しようとするのか，職業に対してどういう意味づけをするのか（キャリア・職業観） ③自分はどの道を歩むのか（キャリア・職業の選択） ④そしてそのためには何をなすべきなのか（職業・専門能力）」の４つをあげている。

キャリア教育についてはこのように一般的な定義や目標は挙げられているが，具体的な教育内容，教育方法は各大学によってさまざまである。キャリア教育を専門とする大学教員の数は少なく，大学において正規のカリキュラムとして「キャリア教育」を受けた経験のある教員は極めてまれであろう。したがって「キャリア教育」に対する考え方やイメージも明確ではなく，教員間の共通理解も十分ではない。一般的に大学教員がキャリア教育に対して抱いているイメージや考え方は，大きく３つに分類されるのではないだろうか。１つめはキャリア教育を，特定の職業に就くために必要な知識や技能を学ぶ職業教育であるとする考え方である。２つめは大学におけるリベラル・アーツ，いわゆる一般教養や教養課程の教育こそキャリア教育であるという考え方である。３つめは専門教育によって培われるジェネリック・スキルを高めることがキャリア教育につながるという考え方である。ジェネリック・スキルとは，特定の専門分野や職種・業種にかかわりなく，大学卒業者レベルに汎用的に求められる能力，スキル，態度特性のことであり，具体的にはコミュニケーション力，チームワーク，問題発見力，問題解決能力，批判的思考力，リーダーシップ，時間管理，自己管理等の能力などを指す。

キャリア教育をどのように捉えるかは，同じ大学内にあっても教員によってさまざまである。また学部の特性の違いによっても，キャリア教育の捉え方は異なってくるであろう。たとえば１つめの考え方は，教員養成，保育士養成，管理栄養士養成など，資格取得を目指す学部学科専攻において多いと考えられる。これらの学部学科専攻では専門教育がキャリア教育と直結しており，専門教育の充実がキャリア教育の充実につながると考える教員が多いのではないだろうか。これに対し３つめの考え方は特定の資格取得を目的としない学部学科専攻に多いと思われる。これらの学部学科専攻では，特別なキャリア教育を行わなくとも，専門教育を充実させることによって高度なジェネリック・スキルが獲得され，それが結果的にキャリア教育に資することになると考える教員が多いのではないだろうか。いずれにせよ，キャリア教育をどのように捉えるかによって，キャリア教育の方法は異なってくる。重要なことは，各大学及び各学部学科専攻において，キャリア教育の考え方や目標を明確にし，共通理解を得た上で，具体的な教育方法についてさまざまな工夫を行うことであろう。

さてここまでキャリアやキャリア教育に関す

る考え方を簡単に整理し，教員のキャリア教育に関する意識について述べてきたが，効果的なキャリア教育を行うためには，いうまでもなく教育を受ける側の意識，つまり学生のキャリア意識について十分な検討を行う必要がある。学生のキャリア意識については，これまでキャリア自己効力感，職業的同一性，職業未決定，職業レディネス，就職動機，職業価値観，職業志向などさまざまな要因が検討されている。本研究では，行動と直接的なかかわりを持つという点で援助的介入の観点から注目されている「キャリア自己効力感」，働くことに対する心の準備状態を表す「職業未決定」，キャリアを選択する際に深く関わる「職業価値観」に焦点を当てて検討を行う。

キャリア自己効力感，もしくは進路選択に関する自己効力感とは，進路を選択する際に必要となる具体的な行動に対して，どの程度自信を持っているかという，遂行可能性を表す概念である。自己効力感の強いものは，自ら進んで努力し，進路選択行動を活発に行う。一方自己効力感の弱いものは，活動が不十分であったり，具体的な活動を避けたりするといわれている。TaylorとBetz（1983）はBandura（1977）の自己効力感理論を，Crites（1965）の進路成熟モデルに応用し，「自己分析」「職業情報の収集」「目標設定」「将来の計画」「課題解決」の５つの領域の自己効力感を測定する尺度を作成した。日本でもTaylorとBetz以後，浦上（1995），富安（1997），安達（2001）など多くの研究者によって尺度の開発，検討が行われている。進路選択に関する自己効力感（キャリア自己効力感）は援助的介入の観点から注目されており，どの領域に関してどの程度の自己効力感を持っているかについて，個人ごとに把握し対応することが，適切な介入のために必要であるといわれている。

職業未決定とは，働くことに対する心の準備状態を表すものであるといえよう。職業決定は青年期後期の最も重要な発達課題であり，この時期に将来の職業についてじっくりと考え悩むことはむしろ重要なことである。しかしながら現代では留年やアパシー，ニート（NEET）など，職業について自己決定ができない消極的，病理的な職業未決定状態も多くなってきている。下山（1986）は職業未決定の状態を測定し分類することを目的として研究を行い，未熟，混乱，猶予，模索，安直の５因子からなる職業未決定尺度を作成した。未熟とは，職業意識が未熟なため将来の見通しが無く，職業選択に取り組めないでいる状態である。混乱とは，職業決定に直面して不安になり，情緒的に混乱している状態である。猶予とは，職業決定を猶予して当面のところは職業について考えたくないという状態である。模索とは，職業決定に向かって積極的に模索している状態である。安直とは，自らの関心や興味を職業選択に結び付けていこうという努力をしない安易な態度である。職業についての自己決定ができない学生に対しては，職業カウンセリングなどの援助が必要となるが，適切な対応を行うためには，まず職業未決定の状態を測定し分類したうえで，各学生の状態に応じた対応を行うことが重要であろう。

職業価値観とは，進路や職業を選択する上で何を重視するかという志向性に係る概念である。キャリアを選択する際，仕事に対する自分の価値観や志向性をしっかりと考え認識しておくことは，キャリアに関する意思決定をより容易にし，より納得のいくものにすると考えられている。Schein（1990）はキャリア・アンカーという概念で，仕事に対する価値観や志向性を説明している。キャリア・アンカーとは，長期的な仕事生活において個人の拠り所となるものである。つまり職業上の自覚された価値観，才能，動機のタイプであり，一度形成されると生涯にわたってその人の職業上の意思決定に影響を与え続けるものとされている。Scheinはキャリア・アンカーを８つに分類している。専門・職能別コンピタンス（専門的なスキルを中心に自分のキャリアを作っていくタイプ），全般管理コンピタンス（組織の中で，より管理・統制できる地位への出世に関心を持つタイプ），自律・独立（組織に属さず，何事も自分の力，自分のやり方で行おうとするタイプ），保障・安定（生活の保障やキャリアの安定に何よりも関心を持つタイ

プ），起業家的創造性（新しい製品やサービスを開発したり，新しい事業を興したいという欲求の強いタイプ），奉仕・社会貢献（世の中をもっと良くしたいという欲求に基づいてキャリアを選択するタイプ），純粋な挑戦（難しいことならどんなことにも挑戦し，自己を試す機会を求めるタイプ），生活様式（生き方全般のバランスと調和を優先するタイプ）などである。自分のキャリア・アンカーを知ることは，キャリアに関するさまざまな意思決定場面で，自分が本当に価値を置いていることや真の自分に一致した方向で，キャリアの選択や決定を行うことを可能にすると考えられている。

以上学生のキャリア意識について，進路選択に関する自己効力感，職業未決定，キャリア・アンカーを中心に述べてきた。大学生にとってキャリアに関する意識を高め，将来の進路を選択していく過程は，重要な発達課題であるといえる。自分の進路について深く考え，自分なりの勤労観や職業観を育てることは，長く続く仕事生活を充実させるためにも重要なことである。キャリア意識の向上は，単に就職活動に対する意識を高め，進路選択を容易にするだけにとどまらない。前にも述べたように，キャリアという言葉を単に職業や職歴とは考えず，「自分の生き方，人生を考えていく上で，働くことをどのように捉え，どのように関わっていくかという，選択と行動のプロセス」であると考えるならば，キャリア意識の向上は人生の充実感や幸福感にもつながっていく可能性を持っている。吉村（2009）は日本の女子大学生を対象とした調査で，自己効力感や職業未決定といったキャリア意識が，大学生活の満足感や幸福感に大きな影響を与えている可能性を示している。また韓国の女子大学生を対象とした調査でも，キャリア意識が大学生活の満足感や人生の幸福感と密接な関係を持っていることを示している（吉村，2012）。したがって学生のキャリア意識を正確に把握した上で，それぞれの学生に合ったキャリアサポートやキャリア教育を開発し充実させてゆくことができれば，単に就職活動に対する意識が高まるだけでなく，大学生活や人生の充実感にもつながる可能性がある。

キャリア教育が学生のキャリア意識を高め，勤労観や職業観を育成するだけでなく，人生の充実感にも繋がるものであるならば，効果的なキャリア教育を開発することは大学における重要な課題であるといえよう。しかしながらすでに述べたように，キャリア教育をどのように捉えるかは，同じ大学内でも教員によってさまざまである。また学部の特性の違いによっても，キャリア教育の捉え方は異なってくるであろう。同様に学生のキャリア意識も，学部によって異なる可能性がある。実効性のあるキャリア教育を構築するに当たっては，各学部の特質や各学部の学生のキャリア意識の特徴を，正確に把握することが重要であると思われる。

そこで本研究では，全学的に実施した学部学生の就職に関する意識の実態調査を元に，進路選択に関する自己効力感，職業未決定，キャリア・アンカーなどのキャリア意識と幸福感について学部間の差異を比較し，各学部の学生の特質に応じたキャリア教育を行うための基礎的な資料を得ることを目的として検討を行った。

方　法

本研究では京都女子大学・京都女子大学短期大学部在学生調査（2008）で得られたデータの一部である京都女子大学在学生のデータに基づいて分析を行った。2008年に行われた調査の概要を以下に示す。

調査対象者　平成19年４月に在籍していた京都女子大学および京都女子大学短期大学部の全学生6248名を対象として調査を行った。有効回答者総数は2610名。回答率は41.8％であった。ただし本研究では短期大学部の学生を除いた1841名のデータに基づいて分析を行った。

調査時期　平成19年３月30日～平成19年４月16日

調査方法　集合調査法による質問紙調査。クラスごとに行われるオリエンテーションの時間を利用して質問紙を配布し，回答を依頼した。

質問紙の回収は，キャンパス内の６箇所に設置した回収ボックスによって行った。

調査項目の概要　調査項目は大きく分けて，フェイスシート，将来のライフコース，進路選択に関する自己効力感，仕事の価値観（キャリア・アンカー），職業未決定，大学生活および人生の満足感（幸福感），将来の進路等の７つの部分から構成されている。

使用尺度　本研究では，以下の４尺度を使用した。

①進路選択に関する自己効力感　安達（2001）および富安（1997）を参考に，50項目からなる尺度を作成し，予備調査を行った。予備調査データの因子分析の結果から，５因子（領域）が抽出され，それぞれ進路選択自己効力感，問題解決自己効力感，計画立案自己効力感，自己適正評価自己効力感，職業情報収集自己効力感と命名された。因子負荷量を参考に各領域５項目が選択され，全25項目からなる自己効力感尺度が作成された。これら25項目について，“まったく自信がない”⑴から“とても自信がある”⑸までの５点尺度で回答を求めた。

②職業未決定　下山（1986）の作成した職業未決定尺度を用いた。未熟，混乱，猶予，模索，安直の５因子からなっている。ただし項目数については因子負荷量の大きさを参考にし，各因子から３項目を選択し，計15項目を採用した。この15項目について，“まったくあてはまらない”⑴から“よくあてはまる”⑸までの５点尺度で回答を求めた。

③仕事の価値観　Schein（1990）を参考に，女子大学生向けに用語等を修正した尺度を作成した。「専門・職能別コンピタンス」「全般管理コンピタンス」「自律・独立」「保障・安定」「起業家的創造性」「奉仕・社会貢献」「純粋な挑戦」「生活様式（ライフスタイル）」の８領域から構成されており，それぞれ２項目からなっている。これら16項目について“まったく同意しない”⑴から“積極的に同意する”⑸までの５点尺度で回答を求めた。

④幸福感　ハッピネス尺度（吉森・植田・有倉，1992）を使用した。この尺度は生活充実感，将来に対する積極的展望，ストレスバッファ（人間関係），自己肯定感の４つの下位尺度からなっており，それぞれ３項目，計12項目で構成されている。各項目について，“そう思わない”⑴から“そう思う”⑷までの４点尺度で回答を求めた。

結　　果

回答者の構成　表１は所属学部ごとの人数を示したものである。合計で1841名の学生から回答が得られた。回収率は全体として34.1％であり，現代社会学部がやや高くなっている。

表１　所属学部ごとの回答者数

	文学部	発達教育学部	家政学部	現代社会学部	合計
回答者数	553	419	419	450	1841
在籍者数	1735	1284	1293	1083	5395
%	31.9%	32.6%	32.4%	41.6%	34.1%

表２　将来の進路目標が決定している学生の割合

		文学部	発達教育学部	家政学部	現代社会学部	合計
決定	人数	229	307	231	147	914
	%	42%	75%	56%	33%	51%
	残差	−4.6	11.4	2.3	−8.3	
未決定	人数	312	100	185	293	890
	%	58%	25%	45%	67%	49%
	残差	4.6	−11.4	−2.3	8.3	
合計	人数	541	407	416	440	1804
	%	100%	100%	100%	100%	100%

進路目標決定状況　表２は将来の進路目標が決定している学生の割合を学部ごとに示したものである。全体としてみれば約半数の学生が，すでに将来の進路目標を決定している。学部によって決定率に差がみられるかどうかを検討するためにχ^2検定を行った。その結果人数の偏りは有意であった（$\chi^2(4)=171.3$，$p=.000$）。残差分析を行った結果，表２にみられるように発達教育学部や家政学部で決定している学生の割合が有意に多く，文学部や現代社会学部では有意に少なかった。発達教育学部では４人中３人の学生が将来の進路目標を決定しているのに対し，現代社会学部では進路目標が決定している学生は３人に１人に過ぎない。

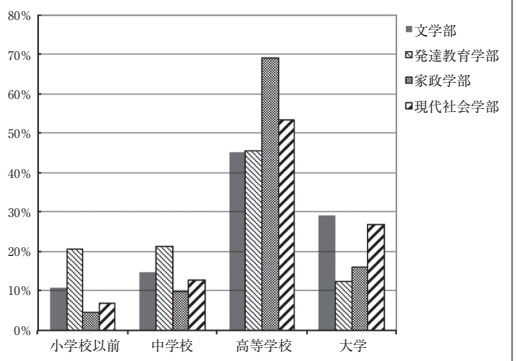

図１　進路決定時期

進路決定時期　進路目標の決定率には学部によって大きな差がみられたが，ではその進路目標はいつ決定されたのであろうか。そこですでに進路目標を定めていると回答した学生に，その時期について尋ねた。図１は，将来の進路目標を定めた時期を，学部ごとに比較したものである。発達教育学部では，早くから進路目標を持っている学生が多く約40％近くの学生が，中学生までに進路を決めている。家政学部の特徴は，高校時代に進路目標を決めている学生が約70パーセントと多いことである。文学部や現代社会学部の特徴は，大学に入ってから将来の進路目標を定めた学生の割合が，他学部より多いことである。このような進路決定時期の違いが，学部による進路目標決定率の差に大きく影響していると考えられる。

学部別のキャリア・アンカー　本研究で用いたキャリア・アンカー（仕事の価値観）の尺度は，Schein（1990）の定義に基づき８領域から構成されている。Scheinが作成した尺度は社会人を対象として作成されたものであるが，本研究では女子大学生用に用語等を修正した尺度を用いている。したがって女子大学生のキャリア・アンカーに対する認知構造はScheinの定義と異なっている可能性がある。

表３　キャリア・アンカー項目群の因子分析結果

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	共通性
自分の事業を起こすことができそうなアイディアをいつも探している。	.792					.535
自分で事業を起こし，発展させたい。	.780		-.116			.734
組織を率い，大勢の人々に影響を与える意思決定を自分で下すような立場をめざしたい。	.677	.238	.131	.253	-.214	.636
自分の才能を人々のために役立てることができたときに，仕事に充実感を感じるだろう。		.787				.522
自分の才能や技能を活用できたときに，仕事でもっとも充実感を感じるだろう。		.696		-.114	.141	.642
人々や社会に貢献できるような職業につきたい。		.675			.222	.635
とてもやりがいのある状況で，問題を解決し成功することができるような仕事に就きたい。	.361	.609			-.143	.790
自分の問題解決能力や競争力を十分に活かせるチャンスのある仕事に就きたい。	.382	.526		.192	-.123	.757
自分のやり方で自由に仕事ができることよりも，将来の保障や生活の安定の方が，自分にとってはより重要である。			.848			.582
将来が保障された生活の安定が望めるような職業に就きたい。			.788		.275	.513
安定した職場にいるよりも，規則や規制にしばられず，自分のやりたいように仕事ができるチャンスがあることが大切だと思う。	.444	.106	-.542		.281	.478
全体の責任者になるよりも，専門分野の責任者になる方が魅力的だと思う。		.131		-.872		.442
ある専門分野の責任者になるよりも，全体の責任者になる方が魅力的だと思う。	.279			.817		.520
自分や家族を優先することができ，家庭生活に支障のでないような仕事につきたい。			.324		.700	.708
自分の生活と仕事のバランスをとることの方が，出世よりも大切だと思う。	-.141	.236		-.109	.592	.625
仕事のやり方やスケジュールを自分で自由に決められるような職業につきたい。	.463		-.167		.536	.604
説明分散	2.50	2.39	1.82	1.57	1.45	9.72

表４　各学部のキャリア・アンカーの平均値と標準偏差

	起業家精神		能力活用と社会貢献		保障と安定		管理職志向		ライフスタイル	
	M	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*
文学部	2.14 a	0.79	3.82 a	0.60	3.80 b,c	0.81	2.29 a	0.80	3.82 a	0.73
発達教育学部	2.15 a	0.76	4.03 b	0.54	3.75 a,b	0.74	2.46 b	0.75	3.94 b	0.69
家政学部	2.35 b	0.87	3.96 b	0.54	3.67 a	0.74	2.29 a	0.72	3.96 b	0.67
現代社会学部	2.38 b	0.86	3.85 a	0.61	3.88 c	0.74	2.56 b	0.76	3.75 a	0.76

注）アルファベットの異なる学部間の平均値には有意差がある

そこでまず回答者の認知構造を確認し尺度を再構成するために，因子分析（主成分分析，バリマックス回転）を行った。固有値の推移及び解釈可能性から因子数を５個（累積寄与率60.8%）に決定した（表３）。第１因子は固有値3.19，バリマックス回転後は「自分の事業を起こすことができそうなアイディアをいつも探している」，「自分で事業を起こし，発展させたい」，「組織を率い，大勢の人々に影響を与える意思決定を自分で下すような立場をめざしたい」といった３項目に高い因子負荷量を得ている。したがってこの因子は「起業家精神」の因子であると考えられる。第２因子は固有値2.27，バリマックス回転後は「自分の才能を人々のために役立てることができたときに，仕事に充実感を感じるだろう」，「自分の才能や技能を活用できたときに，仕事でもっとも充実感を感じるだろう」，「人々や社会に貢献できるような職業につきたい」など６項目に高い因子負荷量を得ている。したがってこの因子は「能力活用と社会貢献」の因子であると考えられる。第３因子は固有値1.80，バリマックス回転後は「自分のやり方で自由に仕事ができることよりも，将来の保障や生活の安定の方が，自分にとってはより重要である」，「将来が保障された生活の安定が望めるような職業に就きたい」という２項目に高い因子負荷量を得ている。したがってこの因子は「保障と安定」の因子であると考えられる。第４因子は固有値1.35，バリマックス回転後は「全体の責任者になるよりも，専門分野の責任者になる方が魅力的だと思う（逆転項目）」，「ある専門分野の責任者になるよりも，全体の責任者になる方が魅力的だと思う」という２項目に高い因子負荷量を得ている。したがってこの因子は「管理職志向」の因子であると考えられる。第５因子は固有値1.11，バリマックス回転後は「自分や家族を優先することができ，家庭生活に支障のでないような仕事につきたい」，「自分の生活と仕事のバランスをとることの方が，出世よりも大切だと思う」という２項目に高い因子負荷量を得ている。したがってこの因子は「ライフスタイル」の因子であると考えられる。この５因子について因子内の項目の平均点を算出し，それを下位尺度得点とした。

つぎに各学部の特徴を知るために，キャリア・アンカーの下位尺度得点を学部間で比較した。表４は各学部のキャリア・アンカーの平均値と標準偏差を示したものである。学部を独立変数とし５因子のキャリア・アンカー得点を従属変数とする１要因の分散分析を行った。すべての因子において学部の主効果が有意であった（起業家精神　$F(3, 1830) = 11.7$，$p = .000$；能力活用と社会貢献　$F(3, 1831) = 12.8$，$p = .000$；保証と安定　$F(3, 1833) = 6.0$，$p = .000$；管理職志向　$F(3, 1831) = 14.4$，$p = .000$；生活様式　$F(3, 1830) = 8.6$，$p = .000$）。主効果が有意であったのでTukeyのｂ検定による多重比較を行った。表４の各平均値の右のアルファベットは多重比較の結果である。どのキャリア・アンカーについても学部間で有意な差がみられた。これらの結果は，進路や職業を選択する上で何を重視するかという志向性やその重要度が，学部間で異なっていることを示している。したがって各学部の特色に合わせたカリキュラムの開発やサポートが必要であることを示唆している。

学部別の自己効力感　自己効力感５領域について下位項目（５項目）の単純加算による尺度得点を算出した。表５は各学部の自己効力感の

表５　各学部の自己効力感の平均値と標準偏差

	進路選択自己効力感		問題解決自己効力感		計画立案自己効力感		自己適正評価自己効力感		職業情報収集自己効力感	
	M	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*
文学部	16.06 a	3.76	16.92 a	3.80	14.65 a	3.62	17.97 a	3.29	17.25 a	3.59
発達教育学部	17.94 c	3.59	18.32 b	3.13	15.42 b	3.38	18.65 b	3.21	17.87 b	3.41
家政学部	16.84 b	3.37	17.34 a	3.39	14.82 a	3.49	17.82 a	3.22	17.16 a	3.44
現代社会学部	15.60 a	3.65	16.90 a	3.58	14.90 a,b	3.58	17.83 a	3.13	17.72 a,b	3.36

注）アルファベットの異なる学部間の平均値には有意差がある

平均値と標準偏差を示したものである。学部間の違いを検討するために，学部を独立変数とし，各５領域の自己効力感を従属変数とする１要因の分散分析を行った。学部の主効果が見られたものについては，Tukeyのｂ検定による多重比較を行った。進路選択自己効力感（$F(3, 1826)=35.3$，$p=.000$），問題解決自己効力感（$F(3, 1828)=15.7$，$p=.000$），計画立案自己効力感（$F(3, 1825)=4.0$，$p=.008$），自己適性評価自己効力感（$F(3, 1825)=6.3$，$p=.000$），職業情報収集自己効力感（$F(3, 1829)=4.5$，$p=.004$）の５領域すべてにおいて学部の主効果が見られた。したがってすべての自己効力感について学部間に差があるということになる。

学部別の職業未決定　職業未決定の５因子について下位項目（３項目）の単純加算による尺度得点を算出した。表６は各学部の職業未決定の平均値と標準偏差を示したものである。学部間の違いを検討するために，学部を独立変数とし，各５因子の得点を従属変数とする１要因の分散分析を行った。学部の主効果が見られたものについては，Tukeyのｂ検定による多重比較を行った。混乱（$F(3, 1826)=13.4$，$p=.000$），未熟（$F(3, 1828)=28.9$，$p=.000$），安直（$F(3, 1826)=65.0$，$p=.000$），猶予（$F(3, 1831)=7.6$，$p=.000$），模索（$F(3, 1830)=21.0$，$p=.000$）の５因子すべてにおいて学部の主効果が見られた。したがってすべての因子について学部間に差があるということになる。

キャリア・アンカーが職業未決定に与える影響　各学部においてキャリア・アンカーが職業未決定にどのような影響を与えているかを検討するために重回帰分析を行った。キャリア・アンカーの５因子を説明変数とし，職業未決定の各因子をそれぞれ目的変数とする一括投入方式

表６　各学部の職業未決定の平均値と標準偏差

	混　乱		未　熟		安　直		猶　予		模　索	
	M	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*
文学部	9.64 b	2.84	9.11 c	2.93	7.36 c	2.18	6.40 b	2.27	10.96 b	1.94
発達教育学部	8.66 a	3.11	7.75 a	2.95	6.08 a	2.00	5.88 a	2.10	10.24 a	2.46
家政学部	8.98 a	2.87	8.57 b	2.77	6.92 b	1.99	6.33 b	2.09	11.36 c	1.96
現代社会学部	9.69 b	2.87	9.45 c	2.88	8.02 d	2.18	6.57 b	2.35	10.87 b	1.96

注）アルファベットの異なる学部間の平均値には有意差がある

表７　文学部における重回帰分析の結果（キャリア・アンカーと職業未決定）

	混　乱		未　熟		安　直		猶　予		模　索	
	β	*p*	*β*	*p*	*β*	*p*	*β*	*p*	*β*	*p*
起業家精神	.027	.564	−.080	.086	.123	.006	.116	.015	.051	.285
能力活用と社会貢献	−.071	.116	−.040	.377	−.153	.000	−.209	.000	.161	.000
保障と安定	.161	.000	.125	.005	.352	.000	−.125	.006	−.026	.563
管理職志向	−.031	.475	.064	.134	.113	.006	−.014	.751	−.020	.645
ライフスタイル	.097	.033	.167	.000	.007	.873	.069	.130	.151	.001
R	.222	.000	.276	.000	.393	.000	.236	.000	.231	.000

表８　発達教育学部における重回帰分析の結果（キャリア・アンカーと職業未決定）

	混　乱		未　熟		安　直		猶　予		模　索	
	β	*p*	*β*	*p*	*β*	*p*	*β*	*p*	*β*	*p*
起業家精神	−.025	.618	−.051	.311	.063	.202	.137	.007	.101	.053
能力活用と社会貢献	−.140	.008	−.208	.000	−.139	.007	−.292	.000	−.076	.159
保障と安定	.187	.000	.155	.002	.274	.000	−.010	.844	.032	.530
管理職志向	−.057	.239	.010	.831	.073	.126	−.059	.216	−.052	.291
ライフスタイル	.007	.888	.009	.856	−.109	.033	−.016	.752	.065	.228
R	.249	.000	.273	.000	.321	.000	.295	.000	.130	.220

の重回帰分析を学部ごとに行った。

表７は文学部における重回帰分析の結果を示したものである。職業未決定の混乱因子および未熟因子に対してはキャリア・アンカーの保障と安定および生活様式が有意な正の影響を与えている。したがって生活の保障やキャリアの安定に何よりも関心を持つタイプの人や家庭生活を重視したいと考えている人は，職業意識が未熟で将来の見通しがなく，職業決定に直面して不安になり情緒的にも混乱する傾向があるということを示している。安直因子には起業家精神，保障と安定および管理職志向が有意な正の影響を，また能力活用と社会貢献が有意な負の影響を与えていた。したがって自分で事業を起こしたいと思っている人や生活の安定を重視している人および全体の責任者になりたいと思っている人は，職業選択に対して安直な態度を持ち，自らの関心や興味を職業選択に結び付ける努力をしていないということを示している。それに対し自分の能力を活用し社会に貢献したいと思っている人は，職業選択に対して安直な態度を持たず，自らの関心や興味を職業選択に結び付ける努力をしているということを示している。猶予因子には起業家精神が有意な正の影響を，また能力活用と社会貢献および保障と安定が有意な負の影響を与えていた。自分で事業を起こしたいと思っている人は，職業決定を猶予して当面のところは職業について考えたくないなどという態度をもっているが，自分の能力を活用し社会に貢献したいと思っている人や生活の安定を重視する人は，そのような態度は持っていないということを示している。模索因子については能力活用と社会貢献および生活様式が有意な正の影響を与えていた。自分の能力を活用し社会に貢献したいと思っている人や家庭生活を重視したいと考えている人は，職業に関する情報をしっかりと集め自分の適職をじっくりと模索していこうという気持ちが強いといえる。

表８は発達教育学部における重回帰分析の結果を示したものである。職業未決定の混乱因子，未熟因子および安直因子に対して，キャリア・アンカーの能力活用と社会貢献が有意な負の影響を，また保障と安定が有意な正の影響を与えている。したがって自分の能力を活用し社会に貢献したいと思っている人は，職業意識が成熟し情緒的にも混乱することなく，職業選択に際し安直な態度を持つことはないということを示している。これに対し生活の保障やキャリアの安定を重視する人は，職業意識が未熟で情緒的にも混乱しており，職業選択に対して安直な態度を持っているということを示している。また安直因子には生活様式が有意な負の影響を与えている。家庭生活を重視したいと考えている人は，職業選択に対して安直な態度を持たず，自らの関心や興味を職業選択に結び付ける努力をしているということを示している。猶予因子には起業家精神が有意な正の影響を，能力活用と社会貢献が有意な負の影響を与えていた。自分で事業を起こしたいと思っている人は，職業決定を猶予して当面のところは職業について考えたくないという態度をもっているが，自分の能力を活用し社会に貢献したいと思っている人は，そのような態度を持っていないということを示している。模索因子には起業家精神が正の影響を与えている傾向がみられるが，有意な影響を与えるキャリア・アンカーは無かった。

表９　家政学部における重回帰分析の結果（キャリア・アンカーと職業未決定）

	混　乱		未　熟		安　直		猶　予		模　索	
	β	*p*	*β*	*p*	*β*	*p*	*β*	*p*	*β*	*p*
起業家精神	−.048	.376	−.072	.176	.101	.048	.149	.006	.052	.345
能力活用と社会貢献	−.133	.013	−.212	.000	−.197	.000	−.265	.000	.143	.008
保障と安定	.170	.001	.132	.007	.358	.000	−.081	.101	−.061	.223
管理職志向	−.067	.201	.055	.284	.025	.606	.012	.819	−.032	.536
ライフスタイル	.044	.397	.071	.162	−.038	.436	.099	.053	.084	.104
R	.249	.000	.291	.000	.408	.000	.268	.000	.209	.003

表10　現代社会学部における重回帰分析の結果（キャリア・アンカーと職業未決定）

	混　乱		未　熟		安　直		猶　予		模　索	
	β	*p*	*β*	*p*	*β*	*p*	*β*	*p*	*β*	*p*
起業家精神	−.098	.049	−.048	.331	.096	.041	.188	.000	.111	.023
能力活用と社会貢献	−.055	.264	−.157	.001	−.217	.000	−.301	.000	.243	.000
保障と安定	.247	.000	.179	.000	.374	.000	−.097	.045	.075	.118
管理職志向	−.042	.384	−.033	.499	.080	.078	.016	.739	−.044	.353
ライフスタイル	.000	.999	.123	.012	.047	.305	.109	.025	.087	.073
R	.288	.000	.298	.000	.442	.000	.316	.000	.328	.003

表９は家政学部における重回帰分析の結果を示したものである。発達教育学部と同様に職業未決定の混乱因子，未熟因子および安直因子に対して，キャリア・アンカーの能力活用と社会貢献が有意な負の影響を，また保障と安定が有意な正の影響を与えている。したがって自分の能力を活用し社会に貢献したいと思っている人は，職業意識が成熟し情緒的にも混乱することなく，職業選択に際し安直な態度を持つことはないということを示している。これに対し生活の保障やキャリアの安定を重視する人は，職業意識が未熟で情緒的にも混乱しており，職業選択に対して安直な態度を持っているということを示している。安直因子には起業家精神も有意な正の影響を与えている。したがって自分で事業を起こしたいと思っている人は，職業選択に対して安直な態度を持っているということを示している。猶予因子には他学部と同様に，起業家精神が有意な正の影響を，能力活用と社会貢献が有意な負の影響を与えていた。自分で事業を起こしたいと思っている人は，職業決定を猶予して当面のところは職業について考えたくないという態度をもっているが，自分の能力を活用し社会に貢献したいと思っている人は，そのような態度を持っていないということを示している。模索因子には能力活用と社会貢献が有意な正の影響を与えていた。自分の能力を活用し社会に貢献したいと思っている人は，職業に関する情報をしっかりと集め自分の適職をじっくりと模索していこうという気持ちが強いといえる。

表10は現代社会学部における重回帰分析の結果を示したものである。職業未決定の混乱因子には，キャリア・アンカーの起業家精神が有意な負の影響を，保障と安定が有意な正の影響を与えていた。自分で事業を起こしたいと思っている人は職業選択に対し情緒的に混乱することはないが，生活の保障やキャリアの安定を重視する人は職業選択に焦りを感じ，情緒的に混乱しやすいということを示している。未熟因子には保障と安定および生活様式が有意な正の影響を，また能力活用と社会貢献が有意な負の影響を与えていた。生活の保障やキャリアの安定を重視する人や家庭生活を重視する人は職業意識が未熟であるが，自分の能力を活用し社会に貢献したいと思っている人は，職業意識が成熟していることを示している。安直因子には起業家精神および保障と安定が有意な正の影響を，ま

た能力活用と社会貢献が有意な負の影響を与えていた。したがって自分で事業を起こしたいと思っている人や，生活の保障や安定を重視する人は職業選択に対して安直な態度を持っているが，自分の能力を活用し社会に貢献したいと思っている人は，そのような態度を持っていないということを示している。猶予因子には起業家精神と生活様式が有意な正の影響を，能力活用と社会貢献および保障と安定が有意な負の影響を与えていた。自分で事業を起こしたいと思っている人や家庭生活を重視する人は，職業決定を猶予して当面のところは職業について考えたくないと考えているようである。一方自分の能力を活用し社会に貢献したいと思っている人や，生活の保障や安定を重視する人は，そのような考えは持っていないということを示している。模索因子には起業家精神および能力活用と社会貢献が有意な正の影響を与えていた。したがって自分で事業を起こしたいと思っている人や，自分の能力を活用し社会に貢献したいと思っている人は，職業に関する情報をしっかりと集め自分の適職をじっくりと模索していこうという気持ちが強いということを示している。

自己効力感が職業未決定に与える影響　各学部において自己効力感が職業未決定にどのような影響を与えているかを検討するために重回帰分析を行った。自己効力感の5領域を説明変数とし，職業未決定の各因子をそれぞれ目的変数とする一括投入方式の重回帰分析を学部ごとに行った。

表11は文学部における重回帰分析の結果を示したものである。職業未決定の混乱因子に対しては，自己効力感の「進路選択」「問題解決」「計画立案」「職業情報収集」の4領域が，有意な負の影響を与えていた。したがって「進路選択」「問題解決」「計画立案」「職業情報収集」の自己効力感が高くなるほど，職業決定に際する「混乱」の程度が低くなるといえる。職業未決定の未熟因子に対しては，自己効力感の「進路選択」「問題解決」「計画立案」の3領域が，有意な負の影響を与えていた。したがって「進路選択」「問題解決」「計画立案」の自己効力感が高くなるほど，職業決定に際して「未熟」ではなくなってくるといえる。職業未決定の安直因子に対しては，自己効力感の「進路選択」「問題解決」「自己適性評価」の3領域が，有意な負の影響を与えていた。また「職業情報収集」が有意な正の影響を与えていた。したがって「進路選択」「問題解決」「自己適性評価」の自己効力感が高く「職業情報収集」の自己効力感が低いほど，職業決定に際して「安直」ではなくなるといえる。職業未決定の猶予因子に対しては，自己効力感の「進路選択」「問題解決」の2領域が，有意な負の影響を与えていた。したがって「進路選択」「問題解決」の自己効力感が高くなるほど，職業決定に際して「猶予」を求める気持ちは低くなるといえる。職業未決定の模索因子に対しては，「職業情報収集」の領域が，有意な正の影響を与えていた。したがって「職業情報収集」の自己効力感が高くなるほど，職業決定に際して「模索」する気持ちが強くなるといえる。

表12は発達教育学部における重回帰分析の結果を示したものである。職業未決定の混乱因子に対しては，自己効力感の「進路選択」「問題

表11　文学部における重回帰分析の結果（自己効力感と職業未決定）

	混乱		未熟		安直		猶予		模索	
	β	*p*	*β*	*p*	*β*	*p*	*β*	*p*	*β*	*p*
進路選択自己効力感	−.288	.000	−.451	.000	−.258	.000	−.168	.002	−.075	.190
問題解決自己効力感	−.120	.009	−.165	.000	−.153	.002	−.196	.000	.044	.395
計画立案自己効力感	−.103	.040	−.110	.013	.046	.389	−.046	.390	.029	.611
自己適性評価自己効力感	−.094	.050	−.056	.187	−.107	.035	−.012	.820	−.033	.540
職業情報収集自己効力感	.006	.899	.074	.068	.139	.004	−.062	.204	.148	.004
R	.483	.000	.629	.000	.368	.000	.376	.000	.159	.019

表12　発達教育学部における重回帰分析の結果（自己効力感と職業未決定）

	混　乱		未　熟		安　直		猶　予		模　索	
	β	*p*	*β*	*p*	*β*	*p*	*β*	*p*	*β*	*p*
進路選択自己効力感	−.352	.000	−.464	.000	−.212	.001	−.093	.130	−.363	.000
問題解決自己効力感	−.157	.002	−.200	.000	−.170	.002	−.195	.000	.002	.978
計画立案自己効力感	−.061	.275	−.043	.378	.157	.009	−.091	.127	.084	.169
自己適性評価自己効力感	−.047	.395	−.061	.211	−.152	.010	−.126	.031	.043	.474
職業情報収集自己効力感	.056	.280	.013	.784	−.014	.795	.006	.913	.008	.892
R	.488	.000	.641	.000	.362	.000	.384	.000	.305	.000

表13　家政学部における重回帰分析の結果（自己効力感と職業未決定）

	混　乱		未　熟		安　直		猶　予		模　索	
	β	*p*	*β*	*p*	*β*	*p*	*β*	*p*	*β*	*p*
進路選択自己効力感	−.288	.000	−.288	.000	−.267	.000	−.067	.259	−.106	.089
問題解決自己効力感	−.168	.001	−.168	.000	−.207	.000	−.247	.000	.074	.193
計画立案自己効力感	−.155	.004	−.155	.121	.211	.000	−.011	.854	−.104	.094
自己適性評価自己効力感	−.030	.555	−.030	.285	.042	.454	.052	.350	.148	.011
職業情報収集自己効力感	−.054	.282	−.054	.348	−.021	.699	−.115	.040	.030	.600
R	.536	.000	.634	.000	.344	.000	.329	.000	.172	.033

解決」の２領域が，有意な負の影響を与えていた。したがって「進路選択」「問題解決」の自己効力感が高くなるほど，職業決定に際する「混乱」の程度が低くなるといえる。職業未決定の未熟因子に対しては，自己効力感の「進路選択」「問題解決」の２領域が，有意な負の影響を与えていた。したがって「進路選択」「問題解決」の自己効力感が高くなるほど，職業決定に際して「未熟」ではなくなってくるといえる。職業未決定の安直因子に対しては，自己効力感の「進路選択」「問題解決」「自己適性評価」の３領域が，有意な負の影響を与えていた。また「計画立案」が有意な正の影響を与えていた。したがって「進路選択」「問題解決」「自己適性評価」の自己効力感が高く「計画立案」の自己効力感が低いほど，職業決定に際して「安直」ではなくなるといえる。職業未決定の猶予因子に対しては，自己効力感の「問題解決」「自己適性評価」の２領域が，有意な負の影響を与えていた。したがって「問題解決」「自己適性評価」の自己効力感が高くなるほど，職業決定に際して「猶予」を求めなくなるといえる。職業未決定の模索因子に対しては，「進路選択」の領域が，有意な負の影響を与えていた。したがって「進路選択」の自己効力感が高くなるほど，職業決定に際して「模索」する気持ちは低くなるといえる。

表13は家政学部における重回帰分析の結果を示したものである。職業未決定の混乱因子に対しては，自己効力感の「進路選択」「問題解決」「計画立案」の３領域が，有意な負の影響を与えていた。したがって「進路選択」「問題解決」「計画立案」の自己効力感が高くなるほど，職業決定に際する「混乱」の程度が低くなるといえる。職業未決定の未熟因子に対しては，自己効力感の「進路選択」「問題解決」の２領域が，有意な負の影響を与えていた。したがって「進路選択」「問題解決」の自己効力感が高くなるほど，職業決定に際して「未熟」ではなくなってくるといえる。職業未決定の安直因子に対しては，自己効力感の「進路選択」「問題解決」の２領域が，有意な負の影響を与えていた。また「計画立案」が有意な正の影響を与えていた。したがって「進路選択」「問題解決」の自己効力感が高く「計画立案」の自己効力感が低いほど，職業決定に際して「安直」ではなくなるといえる。職業未決定の猶予因子に対しては，自己効力感の「問題解決」「職業情報収集」

表14　現代社会学部における重回帰分析の結果（自己効力感と職業未決定）

	混　乱		未　熟		安　直		猶　予		模　索	
	β	*p*	*β*	*p*	*β*	*p*	*β*	*p*	*β*	*p*
進路選択自己効力感	−.299	.000	−.462	.000	−.180	.003	.107	.078	−.138	.023
問題解決自己効力感	.027	.607	−.038	.422	−.222	.000	−.154	.005	.215	.000
計画立案自己効力感	−.116	.041	−.091	.080	.102	.082	−.097	.105	.000	.997
自己適性評価自己効力感	−.021	.693	−.040	.411	−.013	.820	−.087	.121	.076	.170
職業情報収集自己効力感	−.039	.454	.040	.406	.054	.322	−.054	.333	.106	.054
R	.388	.000	.542	.000	.301	.000	.239	.000	.256	.000

の２領域が，有意な負の影響を与えていた。したがって「問題解決」「職業情報収集」の自己効力感が高くなるほど，職業決定に際して「猶予」を求める気持ちは低くなるといえる。職業未決定の模索因子に対しては，「自己適性評価」の領域が有意な正の影響を与えていた。したがって「自己適性評価」の自己効力感が高くなるほど，職業決定に際して「模索」する気持ちが強くなるといえる。

表14は現代社会学部における重回帰分析の結果を示したものである。職業未決定の混乱因子に対しては，自己効力感の「進路選択」「計画立案」の２領域が，有意な負の影響を与えていた。したがって「進路選択」「計画立案」の自己効力感が高くなるほど，職業決定に際する「混乱」の程度が低くなるといえる。職業未決定の未熟因子に対しては，自己効力感の「進路選択」の領域が有意な負の影響を与えていた。したがって「進路選択」の自己効力感が高くなるほど，職業決定に際して「未熟」ではなくなってくるといえる。職業未決定の安直因子に対しては，自己効力感の「進路選択」「問題解決」の２領域が有意な負の影響を与えていた。したがって「進路選択」「問題解決」の自己効力感が高いほど，職業決定に際して「安直」ではなくなるといえる。職業未決定の猶予因子に対しては，自己効力感の「問題解決」の領域が有意な負の影響を与えていた。したがって「問題解決」の自己効力感が高くなるほど，職業決定に際して「猶予」を求めなくなるといえる。職業未決定の模索因子に対しては，「進路選択」の領域が有意な負の影響を与えていた。また「問題解決」が有意な正の影響を与えていた。したがって「問題解決」の自己効力感が高く「進路選択」の自己効力感が低いほど，職業決定に際して「模索」する気持ちが強くなるといえる。

職業未決定が幸福感に与える影響　幸福感については12項目の単純加算による尺度得点を算出した。各学部において職業未決定が幸福感にどのような影響を与えているかを検討するために重回帰分析を行った。職業未決定の５因子を説明変数とし，幸福感を目的変数とする一括投入方式の重回帰分析を学部ごとに行った（表15）。

文学部では幸福感に対し，職業未決定の混乱，未熟，猶予の３因子が有意な負の影響を，また模索因子が有意な正の影響を与えていた。した

表15　各学部における重回帰分析の結果（職業未決定と幸福感）

	幸　福　感							
	文学部		発達教育学部		家政学部		現代社会学部	
	β	*p*	*β*	*p*	*β*	*p*	*β*	*p*
混　乱	−.158	.001	−.059	.322	−.135	.027	−.074	.188
未　熟	−.409	.000	−.498	.000	−.397	.000	−.426	.000
安　直	.002	.969	−.048	.313	−.056	.241	−.006	.898
猶　予	−.106	.008	−.144	.002	−.045	.346	−.114	.012
模　索	.181	.000	.137	.002	.152	.001	.175	.000
R	.557	.000	.605	.000	.537	.000	.521	.000

がって「混乱」「未熟」および「猶予」の程度が大きいほど，人生の幸福感は低下するといえる。また「模索」する程度が高いほど，人生の幸福感は高くなるといえる。

発達教育学部では職業未決定の未熟因子と猶予因子が幸福感に有意な負の影響を与えていた。また模索因子が有意な正の影響を与えていた。したがって「未熟」および「猶予」の程度が大きいほど，人生の幸福感は低下し，「模索」する程度が高いほど，人生の幸福感は高くなるといえる。

家政学部では職業未決定の混乱および未熟の２因子が有意な負の影響を，また模索因子が有意な正の影響を与えていた。したがって「混乱」および「未熟」の程度が大きいほど，人生の幸福感は低下し，「模索」する程度が高いほど，人生の幸福感は高くなるといえる。

現代社会学部では発達教育学部と同じく未熟因子と猶予因子が幸福感に有意な負の影響を与え，模索因子が有意な正の影響を与えていた。したがって「未熟」および「猶予」の程度が大きいほど，人生の幸福感は低下し，「模索」する程度が高いほど，人生の幸福感は高くなるといえる。

どの学部においても未熟因子は幸福感に有意な負の影響を与え，模索因子は有意な正の影響を与えていた。混乱因子と猶予因子の影響は学部によって多少異なるが，いずれも負の影響を与えていた。安直因子はいずれの学部においても幸福感に有意な影響を与えていなかった。

考　　察

進路目標決定状況と進路決定時期　将来の進路目標が決まっている学生の割合は学部によって異なっていた。発達教育学部（75％）が最も高く，ついで家政学部（56％），文学部（42％），現代社会学部（33％）の順であった。進路目標の決定はキャリア意識の形成と深くかかわっている。したがってこの結果は各学部におけるキャリア意識の違いを示唆していると考えられる。しかしながらキャリア意識の形成は大学でのみ行われるのではなく，大学入学以前からさまざまな経験を経て形成される。各学部による進路決定時期の違いは，このようなキャリア意識の違いを反映していると考えられる。各学部の特徴を見ていくと，発達教育学部では，早くから進路目標を持っている学生が多く，約40パーセント近くの学生が，中学生までに進路を決めている。発達教育学部では，小学校教諭や幼稚園教諭，また保育士などの資格取得が可能である。したがって将来幼稚園や小学校の先生，または保育士になりたいと思っている学生は，かなり早くからその意志を固めているようである。家政学部の特徴は，高校時代に進路目標を決めている学生が約70パーセントと多いことである。どの学部でも，高校時代に進路目標を決める学生の割合が一番多いが，家政学部ではその特徴が際立っている。高校生になると家政学部で何が学べるかがよく理解でき，自分の希望や適性との関連で進路選択の判断ができるようになるのではないだろうか。文学部や現代社会学部の特徴は，大学に入ってから将来の進路目標を定めた学生の割合が，他学部より多いことである。大学に入り，いろいろな経験をつみ，いろいろと考え悩んだ末に，自分自身の目標をつかむようになる学生が多いということではないだろうか。このようにキャリア意識の形成には，それぞれの学部によって特徴がみられる。したがって効果的なキャリアサポートやキャリア教育を行うためには，各学部の特徴に十分留意する必要があると思われる。

キャリア意識に関する各学部の特徴　キャリア・アンカーについては，女子大学生の認知構造を確認するために因子分析を行った。社会人を対象としたSchein（1990）の尺度は８領域から構成されていたが，女子大学生では５因子が抽出された。Scheinの専門・職能別コンピタンスと全般管理コンピタンスは統合されて，女子大学生においては管理職志向の因子となっている。奉仕・社会貢献と純粋な挑戦も統合され，能力活用と社会貢献の因子となっている。保障・安定，起業家的創造性，生活様式（ライフ

スタイル）に関しては，女子大学生においても同様の因子が抽出されている。

キャリア・アンカーの５因子をもとに各学部の特徴を見ていくと，文学部は他学部に比べ，相対的に起業家精神，能力活用と社会貢献，管理職志向，ライフスタイルの得点が低い。ただ保障と安定の得点だけはやや高くなっている。自分で事業を起こしたい，自分の才能を生かして社会に貢献したい，全体の責任者になりたい，家庭生活を優先したいなどという気持ちは相対的に低いが，将来の保障と生活の安定は大事にしたいと考えているようである。したがって文学部においてはキャリア意識が他学部ほど強く形成されておらず，進路選択についての具体的なイメージを持っている学生も，あまり多くないのではないかと予想される。発達教育学部は能力活用と社会貢献，管理職志向およびライフスタイルの得点が相対的に高く，起業家精神および保障と安定の得点は低くなっている。したがって仕事と生活のバランスを保ちながら，専門的な能力を生かし人々や社会に貢献したい，また全体の責任者にもなってみたいと考えている学生が比較的多いということを示唆している。発達教育学部には，保育士，小学校教諭，幼稚園教諭など資格や免許を取得することを中心とする学科が含まれている。このような学部の特性が仕事の価値観にも影響を与えているのではないだろうか。家政学部は起業家精神，能力活用と社会貢献，ライフスタイルの得点が相対的に高く，保障と安定および管理職志向の得点が低くなっている。能力活用と社会貢献およびライフスタイルの得点が高く，保障と安定の得点が低いという点は発達教育学部とよく似ている。家政学部には，管理栄養士，社会福祉士，建築士，衣料管理士など資格や免許を取得することを中心とする学科が含まれており，発達教育学部と同様にこのような学部の特性が仕事の価値観にも影響を与えているのであろう。しかし起業家精神と管理職志向については両学部の傾向が逆になっており興味深い。現代社会学部は起業家精神，保障と安定および管理職志向の得点が相対的に高く，能力活用と社会貢献およびライフスタイルの得点が低くなっている。したがって自分で事業を起こしたい，全体の責任者になりたいという気持ちが強いが，同時に生活の安定も重視したいと考えているようである。現代社会学部の結果は，家政学部や発達教育学部の結果と対照的である。家政学部とは起業家精神を除く４つのキャリア・アンカーで有意差がみられた。また発達教育学部とは管理職志向を除く４つのキャリア・アンカーで有意差がみられた。現代社会学部には，人から指示されるのではなく，自分が責任者となり事業を起こしたいと考えている学生が相対的に多いようである。その一方で保障・安定の得点が４学部の中で最も高くなっており，仕事の内容ややり方よりも生活の安定や将来の保障を望む学生もかなり多いことを示している。これらの結果から現代社会学部にはさまざまな志向を持った学生が混在しており，その傾向が他学部に比べて強いということが伺える。

つぎに自己効力感の分析結果から各学部の特色を見ていきたい。文学部はどの自己効力感においても，４学部の中では相対的に低い平均値を示している。とくに計画立案自己効力感は４学部の中でも最も低い。自己効力感の弱いものは，就職に向けての活動が不十分であったり，具体的な活動を避けたりする傾向があるといわれているが，文学部にはこのような傾向を持つ学生が比較的多くいる可能性がある。発達教育学部は文学部とは対照的に，全ての自己効力感においてもっとも高い平均値を示している。これらの自己効力感は，進路を選択する過程で必要な行動に対する自信を表しており，自己効力感の強い者は，自ら進んで努力し，進路選択行動を活発に行うといわれている。したがって発達教育学部には，職業決定に向けて必要とされる行動を自ら積極的に行っている学生が，他学部に比べて多いということが考えられる。家政学部は進路選択自己効力感が中間的な値を示しているが，その他の自己効力感は文学部と同様に低い値を示している。とくに職業情報収集自己効力感は４学部の中で最も低い。現代社会学部は計画立案自己効力感と職業情報収集自己効

力感が中間的な値を示しているが，その他の自己効力感は相対的に低い値を示している。とくに進路選択自己効力感と問題解決自己効力感は４学部の中でも最も低い。以上のように自己効力感は学部によって異なる特徴を持つ。それぞれの学部において特に低い値を示した自己効力感を中心に，自己効力感全般を高めるようなキャリアサポートや，キャリア教育を行うことが重要であると思われる。

最後に職業未決定の分析結果から各学部の特色を見てみたい。文学部は混乱，未熟，猶予の３因子において得点が高く上位グループに属している。また安直因子と模索因子においては中位グループである。したがって職業決定に直面して不安になり情緒的に混乱している状態の学生，職業意識が未熟で職業選択に取り組めないでいる状態の学生，職業決定を猶予して当面のところは職業について考えたくないという状態の学生が，比較的多いということが考えられる。つまり働くことに対する心の準備状態が整っていない学生が，他の学部より多くいる可能性がある。これに対して発達教育学部は５因子すべてにおいて，得点が最も低かった。つまり４学部の中で，働くことに対する心の準備状態が整っている学生が最も多いのが発達教育学部であるといえるかもしれない。家政学部は混乱因子が下位グループ，未熟因子と安直因子が中位グループ，猶予因子と模索因子が上位グループに属している。したがって家政学部は中間的な位置にあるといえる。しかし模索因子の得点が他の３学部より有意に高いという特徴がみられることから，家政学部では職業決定に向かって積極的に模索している学生が多いと考えられる。現代社会学部は混乱，未熟，安直，猶予の４因子において得点が高く上位グループに属している。模索因子においては中位グループであった。この結果は文学部の結果とよく似ている。また安直因子の得点が他の３学部より有意に高いという特徴もみられる。したがって働くことに対する心の準備状態が整っていない学生が，文学部と同様に多くいる可能性がある。

職業未決定に関する学部間の違いは，職業選択自己効力感やキャリア・アンカーにおける学部間の違いと類似している部分が多い。いずれの尺度においても，早くから目標を定め働くことに対する意識が高い学部と，職業選択についてはこれから徐々に考えていこうという学部の違いがみられた。このようなキャリア意識の違いは，職業選択の過程におけるさまざまな行動に大きな影響を与えていると考えられる。したがって全学的なキャリア教育とともに，学部の特性に応じたきめ細かなカリキュラムの開発が必要とされるであろう。それと同時に一人一人の個性に応じた対応も忘れてはならない。たしかに学部にはそれぞれ特徴があるが，同じ学部内にもさまざまな考えの学生がいる。同じ学部であっても職業未決定の状態には大きな差があると思われる。特に個人を対象としたキャリアサポートを行う場合には，職業未決定をはじめとするさまざまなキャリア意識の違いを明らかにした上で，各個人が必要とするサポートを行うことが重要であろう。

キャリア・アンカーが職業未決定に与える影響　職業未決定は働くことに対する心の準備状態を表しているが，キャリア・アンカーはこの職業未決定に大きな影響を与えていると考えられる（吉村，2012）。何のために働くかという仕事の価値観（キャリア・アンカー）が確立していけば，働くことに対する心の準備状態も整っていくであろう。しかしながらキャリア・アンカーや職業未決定は学部ごとに異なっていた。そこでキャリア・アンカーが職業未決定に与える影響について学部ごとに検討を行った。

文学部の結果は多様性に富んでいる。すべてのキャリア・アンカーが職業未決定に有意な影響を与えていた。最も多くの因子とかかわりを持っていたのは保障と安定であった。保障と安定は混乱，未熟，安直の３因子に有意な正の影響を与えており，猶予因子に有意な負の影響を与えている。したがって生活の安定や将来の保障を重視する学生は，職業決定に直面して不安になり情緒的に混乱する傾向や，職業意識が未熟で職業選択に取り組めない傾向，自らの関心

や興味を職業選択に結び付けていこうとしない安易な傾向が強いと思われる。また職業決定を猶予して当面のところは職業について考えたくないという傾向も強いようである。ライフスタイルは混乱，未熟，猶予の３因子に有意な正の影響を与えていた。したがって家庭生活を重視したいと考えている学生には，職業選択に関して不安になり情緒的に混乱する傾向や，職業意識が未熟で職業選択に取り組めない傾向が強いようである。このような関係は他学部では見られず，文学部の特徴であるといえる。能力活用と社会貢献は安直因子と猶予因子に有意な負の影響を，また模索因子には有意な正の影響を与えていた。したがって自分の才能を生かして社会に貢献したいと考えている学生は，職業選択に対して安直な態度を持たず，決定を先延ばしにしたいとも考えていないようである。むしろ職業に関する情報をしっかりと集め自分の適職をじっくりと模索していこうという気持ちが強いといえる。このような傾向は他学部と共通しているが，他学部ではさらに混乱因子や未熟因子にも有意な負の影響を与えている。文学部においては能力活用と社会貢献が混乱因子と未熟因子に有意な影響を与えておらず，興味深い結果となっている。

発達教育学部では能力活用と社会貢献が最も多くの因子とかかわりを持っていた。能力活用と社会貢献は混乱，未熟，安直，猶予の４因子に有意な負の影響を与えていた。したがって自分の才能を生かして社会に貢献したいと考えている学生は，職業意識が成熟し情緒的にも混乱することがないということを示している。また職業選択に際し安直な態度を持つことはなく，先延ばしにしたいという気持ちもないということを示している。２番目に多くの因子とかかわりがあったのは保障と安定であった。保障と安定は混乱，未熟，安直の３因子に有意な正の影響を与えている。したがって生活の安定や将来の保障を重視する学生は，職業決定に直面して不安になり情緒的に混乱する傾向や，職業意識が未熟で職業選択に取り組めない傾向，自らの関心や興味を職業選択に結び付けていこうとしない安易な傾向が強くなるということを示している。起業家精神は猶予因子に対して有意な正の影響を与えていた。したがって自分で事業を起こしたいと思っている学生には，職業決定を猶予して当面のところは職業について考えたくないという傾向がみられるということを示している。この傾向は４学部すべてにおいて見られた。ライフスタイルは安直因子に対して有意な負の影響を与えていた。したがって家庭生活を重視したいと考えている学生は，職業選択に対して安直な態度を持たず，自らの関心や興味を職業選択に結び付ける努力をしているということを示している。この結果は文学部と比較すると興味深い。文学部ではライフスタイルは職業未決定を促進する方向に働いているが，発達教育学部では抑制する方向に働いている。他のキャリア・アンカーには見られない特徴であるといえよう。

家政学部の結果は発達教育学部とよく似ている。最も多くの因子とかかわりを持っていたキャリア・アンカーは能力活用と社会貢献であり，次いで保障と安定であった。能力活用と社会貢献は職業未決定の５因子すべてに影響を与えていた。また保障と安定は発達教育学部と同様に混乱，未熟，安直の３因子に有意な正の影響を与えていた。家政学部と発達教育学部は共に，能力活用と社会貢献の得点が上位グループに属しており，保障と安定は下位グループに属していた（表４）。両学部には資格や免許を取得することを中心とする学科が含まれている。このような学部の特性が類似した傾向をもたらしているのではないだろうか。家政学部の特徴としてライフスタイルが職業未決定に影響を持たないという点があげられる。他学部ではライフスタイルが何らかの形で職業未決定に影響を与えているが，家政学部ではそのような関係はみられなかった。

現代社会学部の特徴は，起業家精神，能力活用と社会貢献，および保障と安定が，それぞれ職業未決定の４因子とかかわりを持っているという点であろう。またライフスタイルも２因子に影響を与えており，全体としてキャリア・ア

ンカーと職業未決定の関係が深く多様である。その中でも特に起業家精神と職業未決定の関係は興味深い。起業家精神は混乱因子に有意な負の影響を，また安直，猶予，模索の３因子に有意な正の影響を与えていた。したがって自分で事業を起こしたいと思っている学生は，職業決定に直面して不安になったり情緒的に混乱したりすることは無いようである。職業に関する情報をしっかりと集め自分の適職をじっくりと模索していこうという気持ちが強いといえる。だが，ややもすると自らの関心や興味を職業選択に結び付けていこうとしない安易な傾向や，当面のところは職業について考えたくないという傾向がみられるようである。現代社会学部は起業家精神の得点が上位グループに属していた（表４）。したがって自分で事業を起こしてみたいという気持ちは相対的に強いと思われる。その気持ちは職業決定に際してポジティブにもネガティブにも働く可能性がある。キャリアサポートや，キャリア教育を行う際にはこの点に十分留意する必要がある。

ここまでキャリア・アンカーが職業未決定に与える影響について学部ごとにみてきたが，学部によってその影響はさまざまであった。文学部や現代社会学部では，キャリア・アンカーと職業未決定の関係が相対的に深くまた多様でもあった。文学部ではライフスタイルが，また現代社会学部では起業家精神が，他学部には見られない特徴的な影響を与えていた。発達教育学部と家政学部は全体的に類似した結果がみられた。資格や免許を取得することを中心とする学科が含まれるという両学部の特質が，結果にも反映されていると考えられる。キャリア・アンカーの視点から見ると，保障と安定の効果はどの学部でも共通してみられ，職業未決定に促進的に働いていた。これに対し能力活用と社会貢献はどの学部でも職業未決定に抑制的に働いていた。起業家精神やライフスタイルは各学部で異なっており，起業家精神は現代社会学部で，ライフスタイルは文学部で大きな影響を与えていた。管理職志向は職業未決定と関係が薄く，どの学部においてもあまり影響はみられなかった。

自己効力感が職業未決定に与える影響　進路選択に関する自己効力感とは，自分の進路を選択する過程において必要となる具体的行動を，どの程度自信を持って行えるかという遂行可能感を表す概念である。この概念は行動と直接的なかかわりを持つという点でキャリアサポートの観点からも注目されており，実践場面での活用が期待されている。職業選択に関するこれまでの研究では，自己効力感が進路不決断（Taylor & Betz，1983）や職業未決定（Taylor & Pompa，1990；安達，2001）に影響を及ぼすことが示されてきた。吉村（2009）は日本の女子大学生を対象とした研究で，各領域の自己効力感が職業未決定の各因子に与える影響について詳しく検討している。その結果，自己効力感の中でもとくに進路選択，問題解決，計画立案の３領域の自己効力感が，職業未決定に大きな影響を与えていることが明らかにされた。しかしながら吉村（2009）の研究では学部ごとの比較は行われていない。本研究の結果は進路選択に関する自己効力感や職業未決定が学部ごとに異なることを示している。そこでキャリア・アンカーが職業未決定に与える影響について学部ごとに検討を行った。

文学部の特徴は自己効力感と職業未決定が密接な関係を持っているという点にある。すべての自己効力感が職業未決定の複数の因子に有意な影響を与えていた。また自己効力感と職業未決定の間には14個の有意な関係がみられた。その中でも進路選択と問題解決の自己効力感は共に，混乱，未熟，安直，猶予の４因子に有意な負の影響を与えていた。この４因子は職業決定に対して未成熟で消極的な態度を示すものである。したがって進路選択や問題解決の自己効力感が向上していけば，職業選択に対する未成熟で消極的な態度は解消されていくと考えられる。計画立案，自己適正評価および職業情報収集の自己効力感は，それぞれ職業未決定の２因子に有意な影響を与えていた。計画立案は混乱因子と未熟因子に，自己適正評価は混乱因子と安直因子に有意な負の影響を与えていた。したがって計画立案と自己適正評価についても自己効力

感が向上すれば，職業決定に対する態度は改善されると考えられる。職業情報収集は安直因子と模索因子に正の影響を与えていた。模索因子は職業未決定状態の中で唯一積極的な態度を示すものであると考えられる。したがって職業情報収集の自己効力感が向上すれば，情報をしっかりと集め自分の適職をじっくりと模索していこうという気持ちが強くなるといえる。その一方で自らの関心や興味を職業選択に結び付けず有名なところであればどこでもよいといった安直な態度も生まれやすいので注意すべきであろう。

発達教育学部では自己効力感と職業未決定の間に11個の有意な関係がみられた。進路選択や問題解決の自己効力感は，文学部と同様に，混乱，未熟，安直，猶予などの因子に有意な負の影響を与えていた。したがって発達教育学部でも進路選択や問題解決の自己効力感が向上していけば，職業選択に対する未成熟で消極的な態度は解消されていくと考えられる。文学部とは異なり進路選択の自己効力感は，模索因子に対し有意な負の影響を与えていた。しかしながらこの結果は，進路選択に関する自信が高まるほど模索しようという気持ちが弱くなるという消極的な意味ではなく，進路選択に関する自己効力感が高い学生は，すでにほぼ進路を決定し，模索したり迷ったりする必要がなくなっているということを示していると考えられる。自己適正評価は安直因子と猶予因子に有意な負の影響を与えていた。したがって自分の能力や適性を正確に把握する自信がつくと，職業選択に際し安直な態度を持つことはなく，先延ばしにしたいという気持ちも生まれにくいということを示している。このような関係は家政学部や現代社会学部では見られなかった。計画立案は安直因子に有意な正の影響を与えていた。したがって計画立案に自信を持ちすぎると，自らの関心や興味を職業選択に結び付けず，有名なところであればどこでもよいといった安直な態度が生まれやすいという危険性を示唆している。職業情報収集は職業未決定に有意な影響を与えていなかった。

家政学部の結果は発達教育学部と類似した点が多い。家政学部でも発達教育学部と同じく，自己効力感と職業未決定の間に11個の有意な関係がみられた。また発達教育学部や文学部と同様に，進路選択や問題解決の自己効力感は，混乱，未熟，安直，猶予などの因子に有意な負の影響を与えていた。したがって家政学部においても進路選択や問題解決の自己効力感が向上していけば，職業選択に対する未成熟で消極的な態度は解消されていくと考えられる。計画立案の自己効力感は，混乱因子に有意な負の影響を，安直因子には有意な正の影響を与えていた。したがって計画立案に自信を持つことは，情緒的な混乱を収めるというポジティブな側面と，安易な職業決定を行いやすいというネガティブな側面の両面を持っているということになる。キャリアサポートや，キャリア教育を行う際にはこの点を十分認識しておく必要がある。自己適正評価は模索因子に有意な正の影響を，職業情報収集は猶予因子に有意な負の影響を与えていた。したがって自分の能力や適性を正確に把握する自信がつくと，自分の適職をじっくりと模索していこうという気持ちが強くなるといえる。また職業情報の収集に自信がつくと，職業決定を先延ばしにしたいという気持ちは薄らいでくるといえよう。

現代社会学部では自己効力感と職業未決定の間に８個の有意な関係がみられた。これは４学部の中で最も少なく，文学部とは対照的である。進路選択の自己効力感は混乱，未熟，安直の３因子に有意な負の影響を与えていた。この点は他の３学部と共通しており，進路選択自己効力感が向上すれば，職業選択に対する未成熟で消極的な態度は解消されていくと考えられる。進路選択はさらに模索因子にも有意な負の影響を与えているが，発達教育学部の場合と同じように，進路選択に関する自己効力感が高い学生は，すでにほぼ進路を決定しており，模索したり迷ったりする必要がないのであろうと思われる。問題解決自己効力感には現代社会学部の特徴がよく表れている。問題解決自己効力感は安直因子と猶予因子に有意な負の影響を与えてい

るが，他の３学部とは異なり，混乱因子や未熟因子には有意な影響を与えていなかった。したがって問題解決に自信がつき自己効力感が向上すると，職業選択に際し安直な態度を持つことはなくなり，先延ばしにしたいという気持ちも薄らいでいくということを示している。しかしながらこの自信は情緒的な混乱や未成熟な状態の解消には直接つながらないようである。計画立案の自己効力感は，混乱因子に有意な負の影響を与えていた。したがって計画立案に自信を持つことは，情緒的な混乱を収めることにつながるといえる。自己適正評価と職業情報収集の自己効力感は，職業未決定に有意な影響を与えていなかった。

自己効力感が職業未決定に与える影響も，学部によりさまざまな特色がみられた。文学部と現代社会学部は対照的であり，自己効力感と職業未決定の結びつきは文学部の方により強くみられた。発達教育学部と家政学部は類似した点が多く，資格や免許の取得を中心とする学科から構成されているという両学部の特質が，ここでも結果に反映されていると考えられる。全体的にみると進路選択と問題解決の自己効力感は，どの学部においても職業未決定と深くかかわっており，キャリアサポートやキャリア教育の観点からも重要であると思われる。計画立案，自己適正評価，職業情報収集の自己効力感の影響は学部によってさまざまであり，学部の特性に応じたサポートが必要であると思われる。

職業未決定が幸福感に与える影響　職業決定は青年期後期の最も重要な発達課題である。もし職業についての自己決定ができず消極的，病理的な職業未決定状態にあれば，人生全体の満足感も低下するであろう。したがって職業未決定は幸福感に大きな影響を与えていると考えられる。吉村（2009）は女子大学生を対象とした研究で，職業未決定の各因子が人生の幸福感にさまざまな影響を与えていることを明らかにしている。しかしながら吉村（2009）の研究では学部ごとの比較は行われていない。本研究の結果は職業未決定が学部ごとに異なることを示している。そこで職業未決定が幸福感に与える影響について学部ごとに検討を行った。

文学部では全学部の中で最も多い４因子が幸福感に有意な影響を与えていた。この結果は文学部において職業未決定が幸福感に深くかかわっていることを示唆している。たしかに文学部はキャリア意識が相対的に低かったが，効果的なキャリアサポートやキャリア教育によってキャリア意識が向上すれば，幸福感も大きく上昇する可能性があるということを示唆している。発達教育学部と現代社会学部の結果は非常によく類似している。いずれの学部でも未熟因子と猶予因子が有意な負の影響を与え，模索因子が有意な正の影響を与えていた。したがって職業意識が成熟し職業決定に正面から取り組もうという気持ちや，積極的に模索していこうという気持ちになれば，幸福感も増大するということを示している。家政学部では混乱因子と未熟因子が有意な負の影響を与え，模索因子が有意な正の影響を与えていた。したがって職業決定に際して情緒的に混乱することなく成熟し，積極的に模索していこうという気持ちになれば，幸福感が増大するということを示している。全体的にみると，どの学部においても未熟因子は有意な負の影響力を持っており，模索因子は有意な正の影響力を持っていた。また安直因子はどの学部においても有意な影響はなかった。以上の結果は職業未決定の状態が人生の幸福感に大きな影響を与えていることを示している。したがって効果的なキャリア教育やキャリアサポートによって職業未決定の状態を改善することができれば，単に職業選択を容易にするだけでなく，幸福感の増大にもつながる可能性があると考えられる。

まとめと今後の課題

本研究では女子大学生を対象とし，進路選択に関する自己効力感，職業未決定，キャリア・アンカーなどのキャリア意識と幸福感について学部間の差異を比較検討した。また自己効力感やキャリア・アンカーが職業未決定に与える影

響や，職業未決定が幸福感に与える影響についても学部ごとに比較し，各学部の特徴や特質を検討した。

進路目標決定状況と進路決定時期の分析から，進路目標の決定はキャリア意識の発達と深くかかわっていることが示され，それぞれの学部の特徴が明らかとなった。発達教育学部では早くから進路目標を持っている学生が多く，約4割の学生が中学生までに進路目標を決めている。家政学部では高校時代に進路目標を決める学生が4学部の中で最も多い。これに対して文学部や現代社会学部では，大学に入ってから進路目標を定める学生が，他学部より多くなっている。

キャリア・アンカー，自己効力感，職業未決定などのキャリア意識についても学部間で興味深い相違がみられた。各学部の特徴をみると，文学部ではキャリア意識が他学部ほど強く形成されておらず，進路選択に対しても具体的なイメージを持っていない学生が相対的に多いようである。言い換えれば，働くことに対する心の準備状態が整っていない学生が，他の学部より多くいる可能性がある。これに対し働くことに対する心の準備状態が整っている学生が最も多いのは発達教育学部であると考えられる。発達教育学部には職業決定に向けて必要とされる行動を自ら積極的に行っている学生が，他学部より多いと思われる。家政学部は4学部の中で中間的な位置にあるが，全体的に発達教育学部と類似した傾向がみられる。また家政学部には職業決定に向かって積極的に模索している学生が他学部より多いという特徴がある。現代社会学部の結果は文学部と類似した点が多い。したがって働くことに対する心の準備状態が整っていない学生が，文学部と同様に多くいる可能性がある。また現代社会学部には，さまざまな志向を持った学生が混在しており多様性に富んでいるという特徴もある。キャリア意識全般を通して，早くから目標を定め働くことに対する意識が高い学部と，職業選択についてはこれから徐々に考えていこうという学部の違いがみられた。学部間のキャリア意識の違いは，職業選択の過程におけるさまざまな行動に大きな影響をもたらす。したがって効果的なキャリア教育を行うためには，各学部の特徴に応じたカリキュラムや教育方法を開発していくことが重要であると思われる。

キャリア・アンカーが職業未決定に与える影響についても，学部によってさまざまな特徴がみられた。文学部や現代社会学部では，キャリア・アンカーと職業未決定の関係が相対的に深く多様であった。文学部ではキャリア・アンカーのライフスタイルが職業未決定の混乱，未熟，猶予の3因子と密接な関係を持っているが，これは他の3学部には見られない特徴である。現代社会学部ではキャリア・アンカーの起業家精神が職業未決定の混乱，安直，猶予，模索の4因子と深いかかわりがあり，他学部にはない特徴となっている。発達教育学部と家政学部の結果は全体的に類似しており，キャリア・アンカーの能力活用と社会貢献が職業未決定の各因子と深くかかわっていた。資格や免許の取得を中心とする学科が多いという両学部の特質が，結果にも反映されていると考えられる。

自己効力感が職業未決定に与える影響においても，学部ごとにさまざまな特色がみられた。自己効力感と職業未決定の関係が最も深かったのは文学部であり，すべての自己効力感が職業未決定の複数の因子に影響を与えていた。対照的なのは現代社会学部であり，自己適正評価自己効力感と職業情報収集自己効力感は，職業未決定のどの因子にも有意な影響を与えていなかった。また問題解決自己効力感も混乱因子と未熟因子に影響を与えておらず，他の3学部には見られない特徴であるといえる。発達教育学部と家政学部の結果は類似しており，進路選択自己効力感と問題解決自己効力感が職業未決定の各因子に影響を与えている。資格や免許の取得を中心とする学科から構成されているという両学部の特質が，ここでも結果に反映されているのではないだろうか。ただ計画立案，自己適正評価，職業情報収集の自己効力感の影響は両学部で異なっており，それぞれの特徴がうかがえる。進路選択と問題解決の自己効力感はどの学部においても職業未決定と深くかかわってお

り，キャリア教育の観点からも重要であると思われる。これらの自己効力感を高めるようなカリキュラムや教育内容を開発してゆけば，働くことに対する心の準備状態も整って行き，職業決定に向けて必要とされる行動を自ら積極的に行うようになっていくのではないだろうか。

職業未決定が幸福感に与える影響に関しても各学部の特徴がみられた。4学部の中で職業未決定と幸福感のかかわりが最も深かったのは文学部であった。文学部は職業未決定の得点が相対的に高く就職に不安を感じている学生が多い。そして職業未決定は幸福感と深くかかわっていた。したがってキャリア教育やキャリアサポートによって職業未決定の状態が改善されれば，幸福感が大きく向上する可能性がある。家政学部の結果は文学部と似ているが，猶予因子は幸福感に影響を与えていなかった。発達教育学部と現代社会学部の結果はよく似ている。全体的にみると，どの学部においても未熟因子は幸福感を低下させ，模索因子は幸福感を向上させていた。また安直因子は幸福感に影響を与えていなかった。これらの結果は働くことに対する心の準備状態が，人生の幸福感に大きな影響を与えていることを示している。

本研究では，キャリア・アンカー（進路や職業を選択する上で何を重視するかという志向性），自己効力感（進路を選択する過程で必要な行動に対する自信），職業未決定（働くことに対する心の準備状態）などのキャリア意識と幸福感について，学部間の比較を行いその特徴を検討した。各学部でさまざまな特徴がみられたが，全体として早くから目標を定め働くことに対する意識が高い学部と，職業選択についてはこれから徐々に考えていこうという意識が強い学部で大きな差がみられた。各学部学科専攻の教育目標や教育内容がこれらの意識に大きくかかわっていると考えられる。また職業未決定の状態は人生の幸福感に大きな影響を与えていることも明らかとなった。したがって職業未決定の状態を改善することは，単に就職活動に対する意識を高めるだけでなく，人生の幸福感につながる大きな意義を持つと考えられる。

本研究の結果は，学生のキャリア意識が各学部で異なっており，それぞれ特徴を持っているということを示している。したがって効果的なキャリア教育を行うためには，全学を対象とする共通カリキュラムだけでは十分ではないと考えられる。まず各学部の特質を踏まえ，各学部におけるキャリア教育の目標を明確に定めることが重要であろう。その目標に従い，各学部の特徴に応じたカリキュラムの開発や教育内容の工夫を行っていくことが必要であろうと思われる。

引用文献

安達智子（2001）．大学生の進路発達過程―社会・認知的理論からの検討―　教育心理学研究，**49**，326−336.

Bandura, A.（1977）．Self-efficacy：Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, **84**, 191−215.

Crites, J. O.（1965）. Measurement of vocational maturity in adolescence：I. Attitude test of the vocational development inventory. *Psychological Monographs：General and Applied*, **79** (2), 1−35.

中央教育審議会（1999）．初等中等教育と高等教育との接続の改善について（答申）　文部科学省〈http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/chuou/toushin/991201.htm〉（2008年7月23日）

Hall, D.T.（2002）．*Careers in and out of organizations*, California ; Sage.

國眼眞理子・松下美知子・苗田敏美（2006）．文系学部生の大学生活満足度・充実度と職業イメージとの関連―キャリア支援のための予備的検討―　金沢大学大学教育開放センター紀要，**25**, 69−84.

Schein, E. H.（1990）. *Career Anchors：Discovering Your Real Values, Revised Edition*, New York ; John Wiley & Sons, Inc.（シャイン，E.H. 金井壽宏（訳）（2003）．キャリア・アンカー―自分のほんとうの価値を発見しよう―　白桃書房）

社団法人国立大学協会教育・学生委員会（2005）．大学におけるキャリア教育のあり方―キャリア教育科目を中心に―（報告書）　社団法人国立大学協会

下山晴彦（1986）．大学生の職業未決定の研究　教育心理学研究，**34**, 20−30.

Super, D.E. (1980). A life-span, life-space approach to career development. *Journal of Vocational Behavior*, **13**, 282−298.

Taylor, K. M., & Betz, N. E. (1983). Application of self-efficacy theory to the understanding and treatment of career indecision. *Journal of Vocational Behavior*, **22**, 63−81.

Taylor, K. M., & Pompa, J. (1990). An examination of the relationships among career decision-making self-efficacy, career salience, locus of control, and vocational indecision. *Journal of Vocational Behavior*, **37**, 17−31.

富安浩樹（1997）．大学生における進路選択自己効力感と進路決定行動との関連　発達心理学研究，**8**, 15−25.

浦上昌則（1995）．学生の進路選択に対する自己効力に関する研究　名古屋大学教育学部紀要　教育心理学科，**42**, 115−126.

吉森譲・植田智・有倉巳幸（1992）．ハッピネスに関する社会心理学的研究(1) ―ハッピネス尺度の開発―　日本心理学会第56回大会発表論文集，189.

吉村英（2008）．京都女子大学・京都女子大学短期大学部在学生調査報告　京都女子大学現代GP「女子学生のキャリア教育の体系化と普及」③アンケート調査報告書，12−80.

吉村英（2009）．キャリア意識の形成が大学生活の満足感に及ぼす影響　京都女子大学発達教育学研究，**3**，23−33.

吉村英（2012）．韓国女子大学生のキャリア意識と大学生活の満足感および幸福感　京都女子大学発達教育学研究，**6**, 41−60.